



KMITLへのJICA技術協力の終了とその後

元JICA長期専門家・ReCCITプロジェクトチーフアドバイザー

なかがわ 史彦
仲川 史彦



1. はじめに

モンクット王ラカバン工科大学（King Mongkut's Institute of Technology Ladkrabang: KMITL）へのJICAの4番目の、そして最後の技術協力となった「情報通信技術研究センター（Research Center for Communication and Information Technology (ReCCIT)）プロジェクト」の最終期、2001年8月から2002年9月末までの約1年間、旧郵政省等から再編された直後の総務省からJICA長期専門家として派遣され、プロジェクトの運用と成果の整理に携わった。KMITL及びReCCITの歴史、経緯及び成果については本特集の他章で述べられているので、ここではプロジェクトの成功を目指した具体的な取組みと成果を、タイの社会の変化とともに筆者の経験を通じて述べる。

2. 当時のタイとKMITLの印象

それまで、技術協力やタイとの関わりはほとんど無く、なにもかも目新しく戸惑うことも多かった。当時のバンコクは、1997年7月にタイから始まったアジア通貨危機の影響が色濃く残り、鉄骨が赤錆びたまま立ち枯れしているビルや高架道路・鉄道が乱立し、道路は大渋滞、わずかな路線を走るスカイトレイン（BTS）を除き公共交通機関はバスや小型トラックを改造した乗り合い自動車（ソンテウ）、近場にはモータバイクタクシー（モタサイ）などが中心で、（偽の）ベンツのエンブレムを付けた小型のバスが黒煙を吐きながら他の車を押しのけ無理やり進み、その中をモタサイが縫って進むような状態であり、事故も多発していた。KMITLのキャンパスのあるラカバンは、バンコクの中心部にある宿所から東に約25kmにあり、自動車及び運転手を借り上げて通勤していたが、高速道路も工事中で、渋滞を避けるため脇道を通ると雨期の最中には自動車がプカプカと浮かぶこともあり、1時間経っても数十メートルしか進まないこともままあった。また、KMITL内の電柱をクレーン車が引っかけて将棋倒しとなり、停電復旧に1週間程かかりPCやエアコンが暫く使えないような事故も起こった。

当時のタイは、2001年1月の下院（人民代表院）総選挙に勝利し政権に就いたタクシン・チナワット（Thaksin Shinawatra）首相率いる愛国党が、財閥や上・中間層（当

時、中間層は極めて少なかった。）等の反発がある中、農民等を中心に多数の支持を得て積極的な経済対策や公共事業、社会保険制度改革、麻薬撲滅等の諸政策を推進していた。しかし、所得の格差が甚だしく、豊富な食料、暖かい（暑い）気候、広い国土のため、地方では金をかけなくても衣食住はなんとか足りる一方、金が必要となった途端お手上げとなる庶民が大多数という社会であった。

また、タイは仏教国であり、赴任早々まだ歓迎会も持たれないうちの8月24日に設立41年記念の行事に参加したが、その中心行事は僧9人を招いた読経と供養であった（図1、2）。

高等教育を目指す若者は、ある程度所得のある家庭の者が多数であるが、努力し奨学金を得たり、一旦働いて学



■図1. モンクット王（ラマ4世）像前での記念撮影（2001年8月24日）



■図2. 9人の僧による読経と供養（2001年8月24日）



費を貯めてから入学、進学したり、就業しながらパートタイムで年数をかけて学ぶ苦学生も多く見受けられた。KMITLは産業界との結びつきも強く、その教育に高い評価を得ていた（電気通信分野ではタイで一位とも評されている。）ことから、卒業後の就職に極めて有利なことも人気が高い理由であった。ちなみに、当時の大学卒公務員の初任給は7,500バーツ（2万5千円程度）であり、民間ではその1.5～2倍程度得られることも多かった。学生は、短期専門家等として長くKMITLに関わった日本の教員によると、「昔はすれ違えばワイ（合掌するお辞儀）をしてくれたものだが、最近は知らん顔だ。」とのことであったが、素直で一生懸命学んでいた。

大学の教授陣は、研究熱心な方が多かったが、毎年同じことを繰り返し一方的に講義するだけでも、学生は先生を尊敬せざるを得ないという風潮もあった。ちなみに、当時学長でも給与は5万バーツ程度（16～7万円）で、教員の中には企業の課題解決に協力し研究開発の課題と資金を得たり（プロジェクトでは推奨していた）、中には企業の顧問等として得るアルバイト料が遙かに給与をしのぐ者もいた。また、プロジェクトに縛られることを嫌い、プロジェクト内に研究室を設けていても工学部内の研究室で研究を続ける（ReCCITに立ち寄らない）者もいた。

3. ReCCITプロジェクト推進のための工夫

プロジェクトの目標は、ReCCITの研究能力を国際レベルに高めることであったが、具体的な成果としては教員及び学生の学位取得数が一つの目安となる。タイの学生は欧米でとられているGPAにより厳密に評価され、その成績表は就職の際も重視される。また、国際会議での発表件数が修士以上の学位取得の条件として義務化されている。しかし、タイや近隣諸国で開催される国際会議は少なく、分野によっては全く無いこともあった。そのため、ReCCITプロジェクトでは国際会議の開催を支援した。2001年11月にKMITLがIEEEとの共催にてチェンマイで開催したISCIT（International Symposium on Communications and Information Technology）には、タイ国内をはじめ近隣諸国からも多数の学生、研究者が参加した。その後、ISCITは情報通信技術（CIT）分野を幅広くカバーする国際会議として毎年アジア各国で途切れることなく開催されており、2020年9月には鳥取市で20回目の会合が開催される予定である。そのほか、信号処理、放送、アナログLSI、EMC（電磁両立）等ReCCITの研究分野に対応した国際会議を開

催し、大学院レベルの学位取得に大いに貢献するとともに、KMITL職員に会議開催、運営の機会を与え、能力、経験の向上に寄与した。

また、タイでは教授（Professor）についても条件が細かに決められており、学長や学部長でも准教授（Assoc.Prof.）が多い。KMITLでは、ReCCITプロジェクト前には教授は2名しかいなかった。その大きなネックの一つが、教科書の出版が義務付けられていることであった。そこで、プロジェクトで出版を支援した結果、ReCCITセンター長であったモナイ（Monai Krairiksh）氏がプロジェクト中に教授位を得るなど、教授位取得の気運が高まった。研究設備の調達が大きな比重を占めるプロジェクト経費の配分としては些少であるが、このような会議開催、教科書出版の支援は、教員、学生のやる気と努力を実現する上で極めて効果が大きかったと考える。

一方、プロジェクト初期に調達したソフトのライセンスが切れ、ソフト自体は動くので研究は進められるが、その結果を公表する際ライセンスを明示する必要があり、慌てて更新しようとしたが、プロジェクト経費に無いライセンス更新料はかなり高額で苦勞したことがあった。本来、大学の自己経費で手当てすべきだが、外部資金で導入した機器の扱いはなかなか難しい場合が多い。

4. プロジェクト終了とその後のKMITLとタイ

2002年5月にReCCITプロジェクトの終了時評価団による実地調査や関係者インタビューを経て、いくつかの点の指摘（当初計画通りの長期専門家をリクルートできず、多数の短期専門家に対処したこと等）はあるが、プロジェクトの当初計画は依然妥当で、かつスケジュール通り終了して成果を出せるという評価を得て、同年9月末で40年余り続いたKMITLへのJICAを通じた技術協力は終わった^{[1][2]}。

KMITLを対象とした技術協力は終了したが、アジア・アフリカ・大洋州向けのKMITLによる研修（第三国研修）は高い評価を受けており継続され、更にラオス国立大学工学部の立ち上がりをKMITLが支援するという協力が始まった（中心人物だったソムサック（Somsak Choomchuay）氏が若くして亡くなったのは、つくづく残念である。）。また、日本とASEAN諸国の大学間連携を図るアセアン工学系高等教育ネットワークプロジェクト（ASEAN University Network/Southeast Asia Engineering Education Development Network：AUN/SEED-Net）にKMITLは電気通信分野の中核大学として参加した。



筆者は、2002年10月1日から、丁度設立が決まった総務省通信総合研究所（CRL。2003年4月に情報通信研究機構（NICT）に改組）のアジア研究連携センター（バンコク中心部から北へ約40kmのパトゥムターニー県タイ・サイエンスパークにある国立電子コンピュータ技術研究センター（National Electronics and Computer Technology Center: NECTEC）ビルに入居）の立上げに参加し、更に2年タイでの生活を送った。その間、いろいろなところでKMITLに関わる方々に出会った。NECTECの研究員、通信事業者の幹部等にもKMITL卒業者が多かったが、NECTECの上部組織であるタイ国立科学技術開発庁（Thailand National Science and Technology Development Agency: NSTDA）長官は、KMITLが独立大学となって第2代の学長だったパイラット（Pairash Thajchayapong）氏であり、NSTDA及び傘下の研究所の研究員は公務員の身分を与えられるが給与は民間並みとするなど、タイの研究開発能力向上の推進を図っていた。氏は、その後科学技術省次官となり、現在もNECTEC特別顧問として活躍されている。また、初代学長のゴーソン（Kosol Petchsuwan）氏は、タイ電気通信協会（Telecommunications Association of Thailand: TCT）会長として活躍されていたが、現在も、タイの将来の科学者を育成する学校づくりに取り組んでいるプリンセスチュラポーン学校の運営委員を務めるなど、いろいろな分野で重鎮となっている。なお、パイラット氏は2007年、ゴーソン氏は2015年に、それぞれ春の叙勲で旭日中綬章を受章されている。KMITLの先駆者は本質を見極める力、実行・実現する力をお持ちのようだ。

また、この頃からタイに進出する日本の大学が増え、AUN/SEED-Netの活動もあり、日・タイの大学間連携が急速に進展した。現在、50以上の日本の大学がタイに拠点を設けており^[3]、教員相互交流、留学生・研修生受入も順調に拡大している。もちろん、欧米の大学もタイに進出したり単位相互認定制度を導入しており、研究能力を国際レベルに高めるというプロジェクトの成果が華開いている。さらに、2007年に日本型ものづくり大学を目指す泰日工業大学（Thai-Nichi Institute of Technology: TNI）が泰日技術振興協会（Technology Promotion Association (Thailand-Japan): TPA）により設立され^[4]、盤谷日本人商工会議所の全面的な協力、日本とタイの多くの企業の支援、日本の大学との連携を得て、産業界への優秀な人材提供を図っており^[5]、KMITLの当初を彷彿とさせる。なお、同校の情報学部長には、プロジェクト当時KMITL副学長だったラチコ

ン（Ruttikorn Varakulsiripunth）氏が就任している（図3）。

なお、アジア研究連携センターには王族を含む多くのVIPが訪れたが、当時全盛だったタクシン首相も2002年12月にサイエンスパークを視察した（図4）。その後、下院総選挙の度にタクシン派が勝利してきたが、クーデターや反政府デモによる混乱が続き、2014年5月に19回目となるクーデターで軍政が敷かれ、軍・警察が多数を占める上院（元老院）が首相指名選挙に投票権を行使できるという憲法改正を経て2019年に下院総選挙が行われ、タクシン派が第1党となったが、軍政派が政権を維持している。また、第3党となった反軍政を主張するアナコットマイ党に対し、2020年2月に解散命令が出された。この間、2016年10月に70年在位し国民に敬愛されたプミポン国王（Bhumibol Adulyadej。ラマ9世）が逝去され社会不安が増した。こ



■図3. 泰日経済技術振興協会 初代表ソンマーイ・フントラクーン氏と、同協会の設立を支援した日・タイ経済協力協会 初代理事長・穂積五一氏の銅像とラチコン学部長（2020年2月25日）



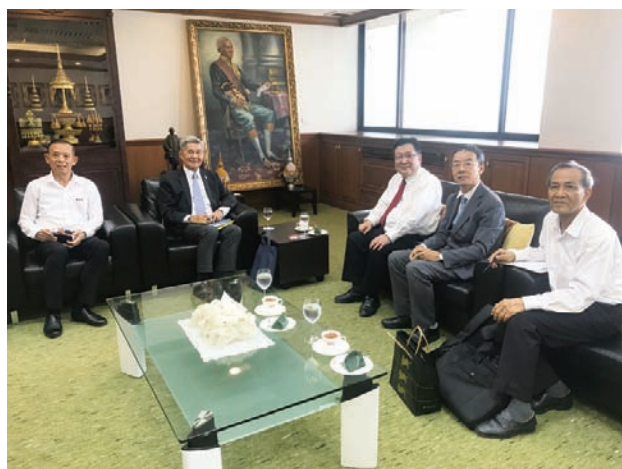
■図4. サイエンスパークを視察するタクシン元首相。手前にパイラットNSTDA長官（当時）、左奥にタウィーサク（Thaweesak Koanantakool）NECTEC所長（当時）（2002年12月23日）

のように、タイでは政治的対立と混迷が続いているが、陽気で明るいタイの人々はいつまでも微笑みを絶やさず未来に向けて歩み続けていこう。

5. おわりに

本稿を執筆するに当たり、2020年2月にKMITLを訪問し、ゴーソン氏、プロジェクト当時学長だったプラキット (Prakit Tangtisanon) 氏や学部長等と面談した(図5)。音楽科学工学院 (Institute of Music, Science and Engineering) というユニークな組織が新設されており、院長のピタック (Pitak Thumwarin) 氏も情熱的で研究への高い意識をお持ちであり、KMITLマインドの発展を頼もしく感じた。残念ながら今回お会いできなかったが、現学長のスチャッチャウィー (Suchatchavee Suwansawat) 氏は、「クリエイティブでイノベティブな技術者の育成」を目指しており、更なる変革が進みそうである。

タイでもコロナウイルス感染が始まっていたがまだ局所的であり、無事に滞在し、自由に移動できたのは、今振り返ると僥倖であった。プロジェクト終了後17年余りの訪問であったが、当時建設中だったスワンナプーム空港が2006年に開港し周辺の交通インフラも進み、広大で空き地も多かったキャンパス内が多くの新しい建物であふれていた。また、福岡工業大学のオフィスも目についた(図6)。プロジェクト当時は東海大学だけであったが、欧米の大学もキャンパス内に事務所を設けているとのことだった。これはKMITL



■図5. モンクット王の肖像画を背景に、左からプラキット元学長、ゴーソン元学長、筆者ほか (2020年2月26日)



■図6. 福岡工業大学KMITLオフィス (2020年2月26日)

やその周辺のみならず、バンコク市内でも多くの都市交通網が急速に拡大整備され、まだ渋滞はあるがバスも新しく清潔で、新しい企業も続々誕生している。一方、未だ準軍政が続きその政策や手腕に国民の批判も多い。地球温暖化による気候変動や水流の減少によるメコン川流域等での農作物の不作も起こっており、地域間格差や収入格差は依然大きいものがある。コロナウイルス対策で露見したように、周辺国の人々を安い労働力として使っていくことにも限界がある。タイの将来は必ずしも順風満帆ではないが、高等教育を受けた若者が成長しこれらの諸課題に立ち向かい、タイ全体の発展に一層貢献していくことを期待している。

参考文献

- [1] 「タイ・モンクット王ラカバン工科大学情報通信技術研究センタープロジェクト終了時評価報告書」2002年6月 国際協力事業団社会開発協力部 <https://libopac.jica.go.jp/images/report/P0000005381.html>
- [2] JICAプロジェクト「情報通信技術研究センター」の概要とその成果 社団法人映像情報メディア学会技術報告 2002年7月25日 https://www.jstage.jst.go.jp/article/itetr/26.52/0/26.52_21/_pdf/-char/ja
- [3] 「タイにおける日本の大学」日本学術振興会 https://jsps-th.org/japanese_univ/
- [4] 泰日工業大学 <https://admission.tni.ac.th/old/web/TNI2014-en/index.php>
- [5] 次代の中核産業人材育成を担う 泰日工業大学 ArayZ 2014年9月号 <https://arayz.com/columns/sub-feature-sep-2014/>